

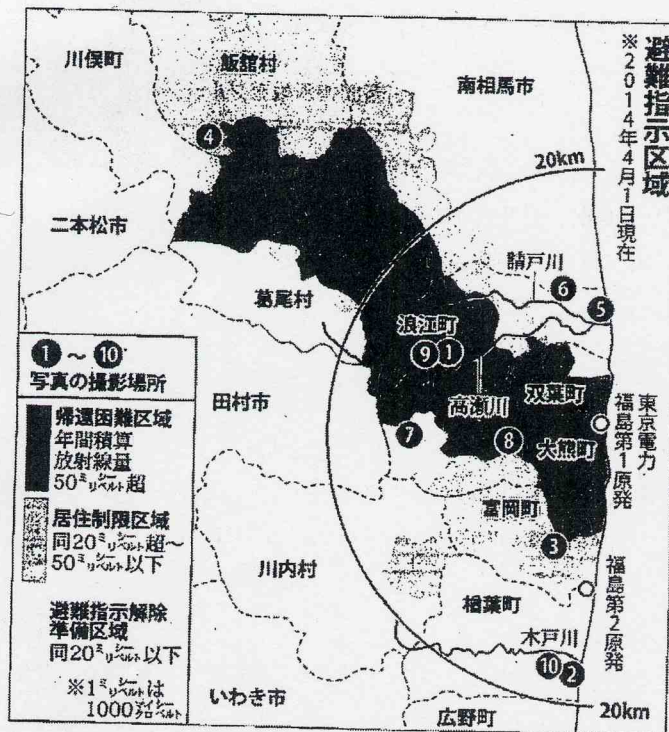
轍わだち

2014, 5, 10

帰りたい美しい古里

5月2日付、毎日新聞には、福島原発事故のため避難指示区域の美しい自然の写真が見開きページ一面に掲載した。満開に咲き誇る桜の大木、川を遡る鮭の姿や、朝日に照らされながら羽ばたく白鳥の姿、木の上に止まるモリアオ蛙など、しかし、雑草が生い茂る田んぼの写真、餌を求めて徘徊する家畜の写真などが、避難民の言葉に表すことができないむなしさ、悔しさを物語っている。(掲示板に写真掲載)

3年と2ヶ月、今なお仮設住宅をはじめ、ふるさとに帰れない8万を超える福島の人々がいる事を忘れてはならない。



「危惧するのは浪江町が無くなってしまうこと、皆同じ気持ちだと分かった。」「ふるさと浪江」を作詩した詩人

「もう町は野山と一緒に、一時帰宅する住民や、生態系を守るためとはいえ、イノブタも原発事故の被害者だよ。」

富岡町繁殖するイノブタ駆除委託業者

「海、山、川がある自然豊かな良いところでした。全て流されて初めて、あの幸せな暮らしが当たり前前の事じゃなかったんだと思います。」浪江町農家夫を亡くした婦人

「11円募金」にご協力下さい!!

実行委員会では、今年から震災が起きた11日に、被災地への応援の気持ちを込める「11円募金」を始めることにしました。今月は11日が日曜日のため、12日(月)に行います。朝登校時に実行委員が呼びかけを行っています。11円でも少ないおこづかいの中では苦しいでしょうが、仮設で暮らしている人々や、親・兄弟姉妹を亡くした人々にプレゼントを贈るために是非ご協力をお願いします。

東日本大震災被災地応援実行委員会一同より

リレートーク

連休はのんびりしよう。体を労おうと思っては見たが…思いついたら直ぐ行動

と言えば体裁がいいが…旅は「行き当たりばったりでもどうにかなる」

と思う私は、3日の早朝から4日にかけて被災地を超スピードで巡ってきた。

始発の新幹線のぞみで東京へ、10分の移動で新幹線はやぶさの立ち席で

盛岡へ、それから内陸部を横切る山田線に乗り換え宮古へ移動。

念願だった三陸鉄道北リアス線（宮古～久慈）に乗車。往復。

その後、宮古で1泊。早朝5：40発のバスに乗り込み釜石へ。

釜石から三陸鉄道南リアス線（釜石～盛）乗車。

盛（さかり）から、バスで気仙沼へ。帰路は一関→東京→京都。

3年たっても見えぬ復興

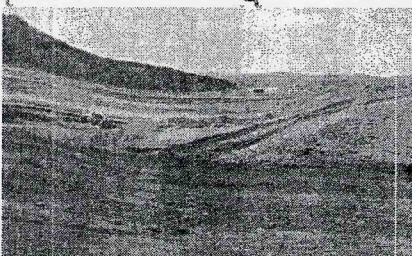
三陸鉄道全線復興の喜びとは裏腹に、目に入る景色は、津波被害の爪痕を残したまま。下車した町の他山田町・大槌町・大船度等津波被害は甚大。

「万里の長城」とも呼ばれていた長大な防潮堤（全長2433m、高さ10m）

を乗り越えて大津波が町を呑み込んだ宮古市田老（たろう）地区。

「遺体 明日への10日間」の舞台となった釜石市にも、

未だ、倒壊した当時そのままの建物が残されていた。

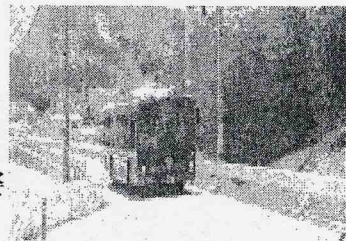


「奇跡の一本松」で知られる陸前高田市は、「かさ上げ」のための土を山から運ぶベルトコンベアー（左写真左端）は出来てはいたものの、眼前にはガレキこそなくなったが、延々と更地が続いていた。

4度目の訪問となった気仙沼の復興はまだ長い時間がかかるだろうと思った。鹿折地区に打ち上げられていた震災を物語る大型漁船（第18共徳丸）の姿は消えた。震災遺構として残すには費用がかかる。その負担が市民にのしかかるならば保存に賛成出来ないというのが撤去の主たる理由だろうと仮設商店街の住人は話してくれた。

被災地沿岸を走るJR山田線の運行はまだである。

錆び付いた線路の横や、延々続く更地の中を列車に代わるバスが走っている。バスでの移動中、胸詰る思いに駆られた。部活に通うのであろう高校生達の姿乗車時間は1時間近く、全員が手を重ね無言で俯いたままであった。



盛（さかり）の町では、5年に1度の祭りが行われていた。痛んだ心が伝統の祭りのお囃子に幾分か癒された。そして、小さな駅の待合いで、偶然にも磯野先生（平安女学院幼稚園園長）にお会いした。先生と記念写真を撮り、元気を得て、後半の訪問先へと歩を進めた。

今井 千和世

（荷台の下には復興支援の感謝の言葉が書かれている）